



「心に残る演奏を届けたいですね」と、中村さん

輝いています

ヴァイオリン奏者

ひと

なか むら み おん
中村 美音 さん

あふれる情熱を音色にのせて

今

月30日にくるで開かれる『ヴァイオリンとピアノで奏でる名曲コンサート』(お知らせ版9頁)。「地元・蔵での演奏が楽しみです」と語るのは、ヴァイオリン奏者の中村美音さん(29歳・塚越4丁目)です。昨年、留学先のロシアから帰国。日本人離れした心を揺さぶる情熱的な旋律が聴く人を魅了します。ピアノストの母を持ち、ヴァイオリンを手にしたのは4歳のとき。幼少時代から各演奏家に師事し、音大付属高校、音大へと進み着実に才能を伸ばしていった中村さん。学生時代には演奏会への出演に加え、音楽番組でのバック演奏など多方面で活動していきま

した。しかし、同時に長いスランプも経験。いくら練習しても本番でミスが生じ、しだいにソロとして人前で演奏することが苦しくなるように。こうしたなか、新たな環境を求めて渡ったのが世界3大音楽院の一つ、ロシア国立モスクワ音楽院です。当初はレッスンの度に「寝ているよう」と評され、相手にもされない日々。それでも必死に研鑽を重ね、「自らを積極的にアピールしよう」と、在籍するオーケストラではいち早く課題曲の奏者を志願します。磨き上げられた技術と熱意でチャンスをつかむと、ソリストとしてチャイコフスキーホール舞台も経験。更に国際コンクールでも成績を収め、周囲の評価を高めていきました。「一から音楽と向き合い、演奏する喜びを再確認できました」と、6年間の留学生活を振り返ります。現在はプロとして活躍する傍ら、市内の教室でヴァイオリンの魅力を伝えている中村さん。母・千恵子さんとの共演も予定されている冒頭のコンサートは、おなじみの童謡からクラシックまで多彩な楽曲が披露されます。皆さんも中村さんが奏でる『美音』に酔いしれてみてはいかがですか。

今月の河鍋暁斎記念美術館

天才絵師の作品 蔵にあり

— No.5 —



かわなべ きょうさい
河鍋 暁斎
天保2年(1831)
~明治22年(1889)

左の作品は、暁斎の親友・浪野東助(1833-没年不詳)が主催した書画会の引札(宣伝広告)です。引札のように、売り物ではない配り物の錦絵を「摺物」といいます。東助は「力持の東助」とも呼ばれたほどの豪の者であり、一方で風雅を好み、暁斎の

自宅もたびたび訪ねています。引札には、東助が大きな筆を米俵に縛って「書画小集」と揮毫すると宣伝し、暁斎がその姿を描いているほか、暁斎が八畳敷大紙に「龍頭観音大士の霊像」を描くことも宣伝されています。『暁斎絵日記』には、確かに当日、暁斎が大きな「龍頭観音図」を揮毫したことが記されています。



暁斎筆 「東助書画会 引札」(部分)

河鍋暁斎記念美術館 期間=25日(火)まで
「暁斎・暁翠の錦絵-版下絵から版画まで-」展
同時開催「堀田操・堀田浅子-二つの旅-」展

開館=午前10時~午後4時 休館=木曜日
ところ=南町4-36-4 入館料=一般540円
中学生~大学生430円 小学生以下210円
詳細=同館(☎441-9780)
(20人以上の団体は要予約)



展覧会の詳しい内容は美術館のホームページをご参照ください

